三保通信

25.1.1

〒424-0401
（株）三保製薬研究所
静岡市清水区中河内一五一三
☎054-396-3321

ここは著者渾身（こんしん）の〝人類史〟が語られているのだと思う。

原初の海に、太古の原形質が生まれたのが、今から三十億年の昔といわれております。以来この海水の中でえいえいと進化を続け、そのあるものは、少なくとも五億年前に脊椎動物の祖先となり、やがて、それが古代緑地へ上陸を敢行する。この悠久の物語りが、母胎の内では、わずか一ヶ月あまりの時の流れで再現される……。子宮の中で録音された母胎の心臓音――まさしく〝血潮〟の響きです。われわれは皆、お腹の中で羊水にひたりながら、この響きを全身の膚で受け取っていた。

この胎内の鼓動には、昔の〝潮騒〟の響きが宿されている。あの顔にかかった羊水のしぶきの、かすかな塩の味とともに、この音響は、われわれに原初の生命記憶を呼び醒（さ）ましてくれるのです。（『海・呼吸・古代形象―生命記憶と回想』三木成夫・うぶすな書院）

花見氏『「内臓感覚を鍛える」』
心ゆくまで舐め回す、、

三木氏のこの著書を読み始めて今回は最後の六回目になる。今まで海、植物、あたま、、と来て、さてどこに行けるのかと考え込んでいた。勿論三木氏には解っていたであろう。

「胎内の世界」〈生命記憶の故郷〉の項で「、、この太古の潮騒の響きを伝える心臓の鼓動、文字通り〝こころ〟の声に、耳を傾けてみようではありませんか。」と助け船をだしてくれているのだ。

「、、〝こころ〟の声に、耳を傾けて、、」の尻取りのような項であるが、

「あらゆるものを心ゆくまで舐め回す幼児の行動が内臓感覚を鍛える」「彼らからこの営みを奪おうとすれば、それは、まさにそのために天から授かった腸管リンパ系をなしくずしに骨抜きにする、おそろしい去勢の行為と知らねばなるまい。」

前号の11／1号で「腸は頭と心しだいの様なのだ」と書いたのだが、頭と心と腸のどっちがどっちというよりこれは一体ということだろうか。

三木氏は「内臓感覚を鍛える」営みが骨抜きにされつつあると言っているようなのだが、「ある日、忽然と回想する」ことはありうるのだろうか、いやいや一歩一歩だろうか。（H）

生命・想い・こころ

Asuke亜紀

「絵の心」(十)
ー「詩人」という人ー

ギリシャ的抒情詩

天気

〈覆された宝石〉のような朝
何人が戸口にて誰かとささやく
それは神の生誕の日。

西脇順三郎（1894-1982)の詩集〈Ambarvalia〉からのこの詩篇を、私は高校一年の国語の教科書で初めて目にした。眩惑に似た衝撃を覚え、周囲の空気が一瞬にして変わったような気がした。後に目にした、清楚透徹な恒久のギリシアの蒼空が教室内に広がった感であった。

感傷的覆いは払われ、研ぎすまされた意識によって「詩」という形態から、『或る他のもの』、〝美〟を顕現させた詩人は、シュルレアリストとして文壇に彗星のように登場した。が、『超現実主義も超自然主義も同じもの…。』と見なされていた西脇の詩の世界は、モダンをも遥かに凌駕しており、やがてそれは日本の寂びの思想にも通じていく…。

詩集〈旅人かへらず〉から

一六七
……
夢の中でも
季節が気にかかる
一六八
幻影の人は去る
永劫の旅人は帰らず

『人生は放浪の旅人』として、孤独な存在の淋しさに自身を映し出しながら、人間存在の神秘、生命の神秘に触れているように思われる。

当時、軍国化への思想統一が進められる社会情勢を考えると、想像を超える強靭な精神力を要する創作であったのではないだろうか。

過去も未来をも内包して永遠に現在がたゆたってゆく。その中から浮び出てくる果てしない空白に、西脇順三郎の詩に〝時〟を超えた魅力を感じる…。

音と沈黙が音楽を生むように、言葉と余白が文学を生む。書くことによって己のうちにあって言葉になり得ない、しかし確かにそこにある叡智の存在を確かめることに徹した詩人の営みは、彼自身を生きることでもあった。ドイツ・ロマン主義の詩人ノバアーリスは『生きるとは彼方の世界へと向かう巡礼の途だ』という。西脇の詩作は、その人自身を顕現させる営み

（3面上段へ）

（2面下段より）だった。

友人でもあった滝口修造に、「日本の文学畑に先人なき種附けをしてきた人」と語らしめた西脇順三郎が70代後半を迎えた頃、都内の文学館で講演会が催された。

夏の暑い日だった。木枠の窓は開け放たれ、白いカーテンは木立から射し込む風に舞って揺れた。蝉の鳴き声がかすかに響く静寂の中に、詩人は現れた。

『…詩は最早、真善美の彼岸にあるもので、人生詩が詩ならば新しい詩とは言えない。…心を分解すればする程心は寂光の無にむいてしまうのだ。』などの意を、時に諧謔的な笑みを浮かべながら語り続けた…。

永遠の無量なる神秘的な世界を顕現させる為に、いかほどの呻吟の時を経てきたか…、私は発せられる言葉の奥底に秘められている深さを垣間見る思いだった。

詩人は、また絵を描く人でもあった。風景画や人物像などを長年に渡って描き続けた。難解な詩に対して絵は解り易いと評された。

没後21年後（2003年）に都内の某画廊で『西脇順三郎と滝口修造の絵画展』が開催された。ブルーを基調とした瑞々しい色彩とタッチが展開され、何処かで出会ったような風景に囲まれて私は心地良いひとときを佇んでいた。画肌の底からぽっかりと浮かんでくる静かな光が漂い、線と線の間に爽やかな風がゆらめき淡い影のような佇まいのような西脇の世界が描き出されていた。

よく歩き、遠路を散歩していた西脇、武蔵野や多摩川べりを分け入って幾多の野草の観察にも没頭したそうである。が、野草だけを取り上げた絵は見当たらなかった。彼が描くのは野草そのものではなく、「野草たち」が詩人に与えた風情、彼自身のVisionであるように思われる。『詩においてそうであるように、絵もまた、永遠の旅人そのものである。

その途々の心象に映じた、刹那の虚無の美しさである。だから西脇さんの絵は具象であるが、そこに描かれているのは夢幻である。』と、詩人安東次男は指摘している。

詩集〈壌歌〉から

人間の思考はいつも
どこか遠い海から送られてくる
何か悲しい音調にひたされている
それは天体的宿命の音楽である
この宇宙的聞こえない悲しみは
脳髄を蒼白にするのだ
そして水仙のように
生物の悲しみに香る

初めて西脇順三郎の詩に出会ってから半世紀の長い年月が経った…。

（4面上段へ）

（3面下段より）私の〝生〟の土壌をも潤（うるお）してくれた「言の葉（ことは）」は、現在の日々の「杖」にもなっているような気がする。人は、本で対話で、あるいは街角で出会う言葉に光を感じることもある。

それぞれの自身を生きることにおいて、人は誰でも詩人なのではないだろうか。好きな「詩」に触れることによって、その人自身の「杖」が招きよせられることを祈りつつ、

感謝と共に。

p2、p3、p4の〝挿絵〟はAsukeさんのもので通信既号で掲載そして弊社踊り場美術館で展示しておりますが、「、、人は誰でも詩人なのではないだろうか。、、その人自身の『杖』が招き、、」、ここの言葉そのままの作品ではないかと思いました。（H）

健康トーク掲示板

拝受の「三保通信」を社頭に並べさせていただきました。当社の社報も含めて、いつの間にか、御参拝の皆様がお持ち帰りになっていただけます。（y・h）

昨今世に「多様性」なる言葉を良く散見しますが、他者の意見を受け入れる度量をもつ余裕が欲しいものと、自戒を込めて深く思う日々でございます。学びの機会を得ておりますことを感謝申し上げます。

骨粗鬆症をめぐる問題を契機とした論を、若松様が執筆されておられました。謹んで拝読いたしました。

骨代謝は非常に複雑かつ難解と存じます。同時に、その複雑さ・緻密さをもつ人体の不思議に感服するばかりでもございます。

骨代謝にビタミンDが不可欠なのは、若松様の御説の通りと存じます。ただこのビタミンDがくせ者かと愚考します。御説の中でも言及の通り、昨今は日焼け止めクリームが広く普及しました。

ここのところの異常気象は確かに怖ろしいものがありますので、UVケアもまた気を巡らせていかなければならない問題と存じます。だからでしょう、春先から秋口までずっとUVケア商品が店頭に並びます。最近は子ども用製品や、赤ちゃん用製品までラインナップが広がっており、少々無頓着な小生は驚いてばかりであります。

化粧品会社さんは商売ですから、正しい知識の普及と共に、しっかりと自社製品を売らないとダメでしょう。もちろん会社はボランティア活動では成立しないのですから。

ただし個人的には、これらのUVケア製品の動きに少々疑問が残ります。オーストラリアや英国での研究の結果、いわゆる3S運動（5面上段）

（4面下段より）が広まりました。ただ、これはホワイトアングロサクソンの極北に近い地域でのお話です。やや緯度の異なる黄色人種の日本人にそのままあてはめるのは無理があろうかと存じます。

事実、骨代謝のことを考えた紫外線曝露の時間についての研究はいろいろ出てきていますが、同じ日本列島でも季節・場所によって大きく差があるというデータもあります。（『時事メディカル』より）

文章中にある２つの情報です。

オーストラリア大学出願センター

オーストラリアの強い紫外線対策 3S とＷ

「①長袖を着よう！②日焼け止めを塗ろう！③帽子をかぶろう！④サングラスをかけよう！」

時事メディカル　日本人は特に植物由来の V.D が摂取されなくなった。（グーグル調べ）

オーストラリア大学出願センターＨＰより

もちろん、そんな小難しいことは関係なく、お肌のケアや美容的見地からUVケアをしなければならないという意見もあります。確かにそういう視点は大切ですし、美を大切に求める女性の心情は尊重されるべきものと思います。

ここでは誰かを責めようとか、自（おの）れこそが正しいのだと、声高に自己主張をしたいわけではありません。我々が留意すべきは「物事を観る視点は複数ある」という心かと愚考します。

他者を非難し、自らの正当性を言い合うだけでは、いささか狭苦しい世の中であろうかとも思います。

本来の「多様性」とは、異なる意見をも尊重できる状況を指すものと信じるものです。我が身を振り返りつつ、そのような視野の狭い心持ちにならぬよう、自戒を込めていきたいと思っております。

〝AIの心はタコに聞け〟

人間とは異なる生物の心を探求する生物哲学者ピーター・ゴドフリー＝スミス氏に聞いた。

（日経『夕刊文化』より）

「自己意識を持つAIシステムを構築したい場合、ソフトウエアにとどまらず、身体を与えるべきだろう」と氏は語るのですが、タコで云えば腕が身体、マダコの身体には5億個のニューロン（神経細胞）があり、一千億個の人間とは開きがあるものの脳の2倍近くに上る。

〝開き〟と言いつつ、A・Iに〝腕〟を付けようとでも、、。

（H）

『腹の健康』第七章　**精神三**

『月刊西医学』一九八一・6月号からの転載です。

前回号で頭痛は「腸が弱っている時、さらにひどくなる」「時々腸障害が頭痛の直接原因となる」ことが書かれています。（H）

腹の健康

西勝造

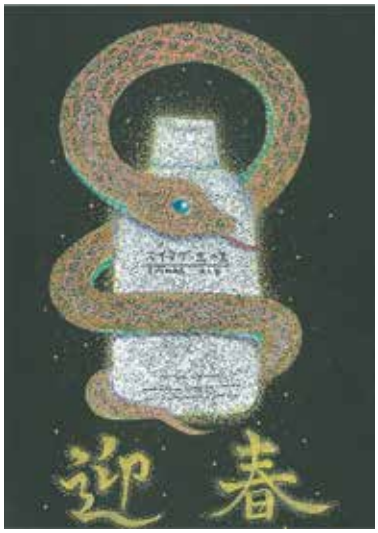
もう一つの神経系統の疾病の徴候は、不眠症である。不眠症は、生活上、非常な重荷になるものであって、その患者にはたえがたいものである。不眠症はしばしば便秘の直接の結果であって、消化不良を起こすから、不眠症となるのであるということを、ここで私が述べるのは、適当なことであろう。

自然の睡眠は、我々の生活において当然でなければならないものであって、人体から種々多様な毒素を排泄してこそ、睡眠は得られるのである。そして体毒が、神経を刺激し過ぎるから、眠れなくなる。腸マヒに悩む多くの患者は、衰弱してくるものである。であるから、腸の活動を正しく回復しなければ全快は出来ないのである。

不眠症は、しばしば精神的な原因を有しているということを私も認める。そして感情が昂ぶって、我々が休息を楽しまなければならない時に、眠れないのである。この場合の不眠状態は、頭脳にたくさんの血液を集中する。というのは思考器官が、その窮境に対して善後策を考えるために、血液が頭に必要になってくるのである。その結果、ねむれないで横たわっている。頭に血液が比較的少なくなれば眠れるのであるが、それが出来ないのである。

もし不眠症が、精神的方面に基因するものであるならば、それは精神的治療法で治さなければならない。何人も薬剤を用いて眠りを得ようとすることは、かえって禍を求める事である。デューウイ博士が『朝食有害論』の中で叫んでいる。我々の排泄器官に留意し、そして排泄器官を忘れ、障害となる糞便を完全に排泄してのみ、我々は万病の原因をなす不眠症を首尾よく根治しえるものである、と。

〃ゆみゴンイラスト〃は『**ヘビの点描画**』(**葉書大**)です。印刷の精度は別にして原画は素晴らしいです!!　（H）



あとがき

「健康トーク掲示板」のｙ・ｈさんが語られた「多様性」については、かつて自身も考えたことがあります。「美」には、絶対的な「美」が存在するのか、それとも人の数だけ「美」の正解があるのか。永遠のテーマです。（Y）